阿部知二全集

第10巻

阿部知二全集

第10巻

河出書房新社

阿部知二全集　第10巻

一九七四年十月五日　初版印刷
一九七四年十月十日　初版発行

著　者　阿部知二
装　画　平塚運一

発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話(〇三)二九一—三七一一
振替東京一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

主知的文学論 9
主知的文学論の略図 11
I
深淵の前に 17
主知的文学論 23
文明と文学及その方法 29
方法論の問題 37
新文学の精神について 40
文学の変革期に於て 45
II
Coleridge と Poe 57
小説の研究 64

詩と散文 72
表現について（T・E・ヒウムより抄訳） 77
灰　燼（T・E・ヒウム） 78
文芸批評と科学・精神分析 83
実証的批評 88
英詩壇の二潮流 92
厳粛なるジオン・キイツ 96
III
文学及び文学者の運命 100
文芸の二途 102
逆説的な感想 104
*
佐佐木茂索論 113

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

「故園の書」を読みて 119
文学と純粋 123
東西の小説精神 129
感傷主義 139
文学と倫理 149
文学と肉体 156
リアリズムの問題 161
リアリズムと真実 173
終局の秩序について 178
文学に於ける時間 182
絶望の泉 186
文学の健康性 190

文学と時代 195
山本有三氏の芸術 210
文学への信念 222
文学の読者 228
文学に於ける西洋的知性 237
日本の小説家 240
ヒューマニズムと文学 249
現代に於けるヒューマニズムの位置 255
ヒューマニズムの反省 262
伝統と道徳 266
特殊文化と最高文化 271
田舎と都会 274

自作案内 278
漱石の小説 284
漱石と現代小説 295
芥川龍之介 306
解題 福田久賀男 317
解説 中村眞一郎 325

阿部知二全集　第10巻

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

主知的文学論

主知的文学論の略図

——序文に代へて

I

大まかに、詩と散文とを一緒にして考へてみてもいい。文学が、人間の知的活動そのものであるといふことは過りであるとしても、文学には、「知的なもの」がふくまれてゐることを疑ふことはできない。そして、文学に於ける「知的なもの」を中心として、文学を考究することは無益なことでないと言へる。そして、その際に、文学と知性との関係を、大体二通りに分けてみることが便宜であると私は考へる。

その二通りといふのは、I、内容として、II、方法としてであると思ふ。後の「主知的文学論」その他にもあるやうに、真実の意味の Intellectualism は、IIの方に存在するのであつて、Iの場合がそれに包含されるのは、極めて放漫（ルウス）な意味に於てでしかない。われわれが日常目撃する Intellectualism に対する解釈、あるひはそれに対する非難などは、多くはこの、Iのみを考へた素樸な議論である。そして本質的に考へれば、それについて考慮する必要はないのであるけれども、今言つたやうに、広義に取れば、その要素も入るのであるし、殊に、小説等の散文をもその考察のなかに入れるときには、当然いくらかの考慮をはらふことも正しいとも思はれるから、今、整理上、この内容としての Intellectualism を一瞥してみる必要を感じる。

（—ism といふ字が、必ず、「主義」といふ日本字によつて表現せられなければならないとすれば、当然、「主知主義」といふ文字が使はれなければならないであらう。しかし、「主義」とは、われわれの国では、とかく、或る一つの Doctorine—教義を遵奉して人間の全的な行為をそれに縛りつけることを意味するやうである。——若しこのやうな意味であるとすれば、この場合「主知主義」といふ言葉は使ふべきでない。そして私はその事を恐れてこの言葉を使はない方がいいと思つてゐる。Intellectualism とは、文学に対する考察に於ける、主知的傾向である、といふ意味に考へる方が妥当であらう。以後「主知主義」の字が使用されても、その意味でである。）

II

前にも言つたやうに、文学に、「知的なもの」が存在するとすれば、時代により、文学の進展のために、その「知

的なもの」に対して、他の時代に於てよりも、より多くの考慮をはらつて、これに重点を置いて文学を考へようとすることもあるであらう。その傾向に、われわれの時代がその文学的状態に於て遭遇してゐるとおもはれる。

まづ、内容を中心として考へよう。

I　内容としての主知的傾向。これは、前に言つたやうに、素樸な文学観によつても理解することの出来る世界であり、あるひは、素樸なリアリズムの世界といつてもいいものであらう。これを了解するのには、われわれが現代の文学的現象を一瞥すればいいのである。主として大衆を相手とする散文の範囲に多いことではあるが、現代の流行の中心になつてゐる文学に、報告的、記録的文学があることを見るだけでも了解できるであらう。科学――（自然科学、社会科学、精神科学）、又は、思想的内容の歓迎。あるひは時事的な題目の歓迎。これらが、現代の世界の best-sellers の特徴になつてゐる。我国での最近の、文学に於ける功利的要素の重視なども、知的な要素が、もともと、文学といふ芸術的フォルムの必然の性質としてその中に存在してゐたのであるが、――現代に於て、他の要素を圧迫するまでに、肥厚したことを示すものであらう。

このやうな文学的状態について、考察することも、文学評論の重大な一つの任務であることは否まれない。おそらく、文学が今後とも社会内に於て繁栄を恢復し、あるひは増大して行かうとするならば、この方面について、社会的、文明的批評、あるひは技術的論究がますます必要になるにちがひない。民衆の読物としての大衆文学、あるひはプロレタリア文学などは、このやうな意味での、――つまり、素材、内容的意味での知的要素を重視しなければならないであらう。

さて、この意味に於ける主知的傾向は、その発展に於て、二つの途をたどらなければならないであらう。一つは、低度な知的要素の尊重は、文学を、ついに新聞記事と同一のレヴェルに堕すことになるといふことである。これは芸術的な自殺に等しい結果になる。大衆が文学に必要であることは、文学が芸術的に自殺してもいいといふことを示さないことは注意しなければならない。次に、今一つの途は、この程度に於ける文学が、意識的に、科学（社会科学、自然科学、精神科学等）の方法を採用することによつて、積極的に、われわれの文明的現象、時代精神と結びつかうとすることである。そして、それらの一歩前に、つまり時代の文明的進歩の一歩前に、探究者（勿論文学を守つてである。）として進むことである。そして、これは、いつのまにか、素樸な文学観の世界を脱して、次の命題下で示すやうな、文学の進歩と直接の関係をもつところの、本質的な

意味の主知的傾向に推移するのであらう。

III

方法としての主知的傾向——II、——は何を指すのであるか。

それには、文学に対する次のやうな解釈がその出発点に必要になるとおもふ。——文学は（主として）感情の表現と伝達であるとしても、われわれが、そのことに文学を使用するといふことは、われわれが、知性を以つてその感情を取扱ふことになるのであるといふ考へ方を出発点にすることが必要になるのである。このことを、製作を中心にしていへば、文学とは、知性を方法としてわれわれの感情の前後左右にひろがる未知の世界を探究し、これに秩序をあたへて再現する、といふやうなことになる。又、このことを、観照、批評の方面からいへば、その感情の世界を知的に認識することによつて、われわれの経験を秩序ある豊富さを持つものとすることになる。

——以上のやうな、文学に対する理解のしかたは、或は一つの仮説の範囲を出ないといへるかもしれない。それであるから Intellectualism が、この観点を守ることによつて、その文学方法をすすめてゆくといふことは、あるひは一つの教義による文学になることであるかもしれない。それであるから、この意味では、或は主知主義といふ言葉に相当する特性をそなへてくるかもしれない。（「主知的文学論」の稿等参照）

そして、ここに言ふところの知性とはどのやうなものを指すのであるか。芸術的制作の際に於ける、凝固した熾烈な精神力とは、単に情緒的な燃焼ばかりではなく、いやしくもそれがエネルギイと秩序をもつ限りに於ては、知的なものを多分に持つてゐると、私は信じてゐるのではあるが、——いま、このやうな創造の核心の事象を推測することは主観的になる恐れもあるから、今一歩ゆづつて、やや客観的に叙述することの出来る、文芸批評の核心ともなるべき知性について考へよう。そのやうな知性とはどのやうなものであるか。われわれは、文芸の批評が、他の何物かの知的なものと結びついてゐることを否定出来ない。それは、ある場合には哲学である。ある場合には科学である。このやうな要素を、緊密に、そして正当に、文学観照の精神と結びつけることによつて、批評ははじめて強固な批評となり得るものであることは、歴史的にみて証明できるのである。——しかし、そのやうな知性の他に、今一つ見逃すことの出来ないものがある。それは、われわれの文学観の究極の中心をなすものであるはずである。それは、純粋な故に見逃がされ勝ちであり、また漠然とした名前しか付けら

れないところのものである。文学を文学として守るところのものである。今、これを仮りに、文学的思想と名付けるとする。さうすると、この文学に於ける文学としての「思想」とはどのやうなものであるか。おそらくこれを白日の下に解剖することは許されないことであらう。しかし、われわれは、これを次のやうなものを中心要素としてゐると考へてもいいのではなからうか。つまり、それは文学に於ける「伝統的なもの」である。つまり、過去から現在にいたるまでの、文学的な情緒（エモオジヨン）のうちの、優れたものが抽出され、累積されたものである。そして、それは、前に言つたやうに、制作、観照、批判の作用に於て、すでに一旦、知性を濾過されたものであるから、一つの思想（知性）としての相貌と機能を持つことが出来るのである。このやうな累積による文学的思想こそが、批評だけでなく、創作に於ても、われわれを指導する最も強固な核心となつてゐるとおもふのである。——これはいひかへれば、「criticismの精神」と名付けていいであらう。それは、批判し制作する機能をもつまでに、個々の文学的情緒（エモオジヨン）の状態から成長してゐる。故に、一つの知性（インテリジエンス）である。

（——このエッセイ集は、このやうな第二の立場に於ての主知的傾向を中心にして、それと社会との関係、さらに主として、あるひは文明、大衆、等との関係についての考察をあつめてゐる。第一の場合に於ける広義な、素樸な意味のそれはほとんどその論考の外にあつた。）

Ⅳ

以上のやうな意味に於ての主知的傾向が、どのやうな意味を、今日の文学に持つてゐるかといふことは、前節の終りの註に言つたやうに、この書物の随処にあつめられたエッセイが説明してゐるのである。しかし、ここにも、その歴史的な位置と、それから現代に於けるその位置との略図を描いて置かうと思ふ。

周到な考究と説明をしないでいふことはやや危険であるが、文学に於ける主知的な傾向は、歴史的にみれば、classicism の精神に結びついてゐるものとみていい。

（Classicism と Romanticism について詳しいことは避けるが、それは、文学史上に於ける流派の名前でなく、文学に於ける二つの精神とみることが文学批評の上では有益でないかとおもふ。この二つの精神は、時代と時代とに交替して興亡盛衰することもあると同時に、一時代の中にも併存する。又、一個人の中に併存する。「クラシシズムとロマンテシズムのあひだの争闘はまた個人の中にも存在することを考へなければならない。作品を生むのは実にこの争闘のうちからである。クラシックな芸術品とは、内部のロマンテシズムに対する秩序と統制の勝利を物

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo